

赤の力
Part I

RED: COLOR OF FIRE, COLOR OF LIFE

赤は火の色

2021年6月5日(土) — 7月18日(日)
高崎市染料植物園 染色工芸館



—— 赤い色に願いを込めて ——

生命の色

元来「赤」は、太陽の色であり、火の色であり、体内に流れる血の色であり、生きていく根源なるものをあらわす色でした。そこに人は畏怖と畏敬の念を抱くと同時に、身近にその色を配りたいと願ったのではないでしょう。か。

本展では、茜^{あかね}、紅^{べに}、花^{はな}、蘇^{すおう}芳^{ほう}、ラック、コチニール、弁柄^{べんがら}といった古くから「赤」を染めるのに用いられてきた天然染料や顔料と、その染織品を展示します。また、市内の遺跡や古墳から出土した赤彩がなされた土器や埴輪^{はろ}、天然痘除けや魔除けとして赤が使われた達磨^{だるま}や郷土玩具も紹介します。

人々が赤い色に込めてきた祈りや願いに思いを寄せ、「赤の力」を感じていただく展示です。

〔図版〕丑丸浩「弁柄染 日よけのれん」(部分)(国所蔵)

ベンガラは繊維の表面に付着して色をつける顔料であり、熱に強く変色しにくいので暖簾^{のれん}などを染めるのに利用されてきました。豆汁^{こじり}(生大豆のしぼり汁)と混ぜて布を染めます。